□研究会 Seminar

アメリカの社会とポピュラーカルチャー

〈第 6 回研究会〉

トマス・ナストの風刺画の世界
――サンタクロースとアメリカ大統領をつくる

講師：貴堂嘉之（一橋大学教授）
コメンテーター：金澤宏明（明治大学兼任講師、都留文科大学非常勤講師）
司会・ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ：生井英考（立教大学教授、アメリカ研究所副所長）
日時：2014 年 10 月 4 日（土）15:00-18:00
会場：立教大学池袋キャンパス 11 号館 3 階 A302 教室

立教大学アメリカ研究所が 2011 年度より開催している「アメリカの社会とポピュラーカルチャー」研究会の第 6 回研究会は、貴堂嘉之氏を招き、トマス・ナストのライフヒストリーについて報告を行っていただいた。

19 世紀アメリカを代表する政治風刺画家トマス・ナストは、肥満体を赤服に包んだ白ひげの老爺というサンタクロース像をアメリカに定着させただけでなく、アンクル・サムやミス・コロンビア、共和党の象や民主党のロバなど、彼が作り出し、あるいは彼が使うことで有名になった政治表象を数多く持つ。貴堂氏は、南北戦争とその後の再建政治の時代の社会背景や出版文化の状況を概説した上で、大衆的な政治言説の作り手としての隠れた顔にも焦点を当てながら、ナストのライフヒストリーを検証した。報告では主に『ハーパーズ・ウィークリー』に掲載された数多くの図像資料を丹念に読み解き、その社会背景やナストの制作意図、さらに風刺画が社会に与えた影響を考察することで、公的な文字史料では窺い知れない当時のアメリカ社会の姿が鮮明に描出された。また奴隷解放宣言から 2 日後に初めて登場したナストの描くサンタクロースも、政治的和解のアイコンとして描かれており、家族共同体としての国家再創造の一翼を担う存在であったことが論じられた。

続いて貴堂氏の報告に対し、金澤宏明氏からコメントがあった。金澤氏は、タマニー・タイガー、トランプの風刺、アンクル・サム、ミス・コロンビアなどの例を挙げ、トマス・ナストの風刺画から「本歌取り」的作品が多数生み出されたことを指摘し、時代や地域を越えてナストの影響力が及んでいたことを論じた。また風刺画及び図像史料の史料批判、操作の意識化について議論を展開した。さらに貴堂氏の報告に対して、ナストは「まなざす」側としてマイノリティを擁護する意識

があったが、「まなざされる」側の意識を析出する方法があるのかといった質問がなされた。

第 6 回研究会の内容をもとに、貴堂氏、金澤氏から加筆・修正を施し本誌に寄稿していただいた文章を以下に掲載する。